

美術表現研究 講義「幼児表象画」 スクリブル期の描画発達

竹永亜矢

Art Expression Study, "Infantile Representational Drawings": Drawing
Development during the Scribble Period

Aya Takenaga

Abstract

Actual experience of drawing in the scribble period in the developmental history of an infant's representational drawing behavior, which starts at age 0, can be said to be the most important period for a child, who develops through interactions with every aspect of the world through drawing, to develop rich expressions spontaneously and proceed with his or her developmental process at his or her own timing.

Based on the analysis and reflection of drawings in the scribble period, this paper presents the importance and understanding of such drawings which everyone from an infant to an adult has experienced as well as one way of supporting rich drawing experience.

Keywords: infantile representational drawings, scribbles, development of drawing behavior, actual experience, drawing experience support, expressions in art, Rhoda Kellogg

要約

0歳から開始される幼児表象画スクリブル期における描画の実体験は、描画を通しあらゆる領域と関わりながら発達を遂げる子どもにとって、豊かな表現を自発的に展開させ、自己のタイミングで発達過程を進めていくうえで最も重要な時期と言える。

本論では、スクリブル期の描画分析と考察から、幼児から大人まで誰もが持ち合わせているこの描画活動の重要性と理解、豊かな描画体験支援のありかたを呈する。

キーワード： 幼児表象画, スクリブル, 描画発達, 実体験, 描画支援, 美術表現,
ローダ・ケロッグ

1. はじめに

児童描画の心理的研究者ローダ・ケロッグ (Rhoda Kellogg 1998) は、人間は生まれて初めての描画、スクリブル (scribbles/様式段階) に始まり、ダイアグラム (diagrams/単体図/形態段階) コンバイン (combines/結合図/デザイン段階) アグリゲイト (aggregates/集合図/デザイン段階) そして 4~5 歳頃よりピクチャーステージ (picture・stage/絵画期) へと発達していくと論じている。

子どもは 0 歳から 3 歳までの間に脳や安定した精神の基盤になる発達を獲得する。幼児表象画におけるスクリブル期がこれと重なり、点、線を中心とした「スクリブル」を描き、スクリブル描画から獲得した形態 (表 1) は描画の素材としてイメージが蓄積され、より豊かな描画表現の基盤となる。この時期、子どもは五感を通してあらゆる方法を試みながら活動を始め、自身の肉体運動から生じた軌跡 (スクリブル描画) はその第一歩となる。

“なぜ、子どもはスクリブルを描画するのか” スクリブル期の作品を視ていると、描画に表れるのびやかで躍動感のある線、自身の運動により生じた軌跡に表れる感動は、原始の時代より人間が創造する原動力となっている生き活きとした「楽しさ」を感じさせる。絵画における線の芸術と言われる要素すべてを誰に教わることもなく意欲的に探索し、描画表現する姿はまさに芸術家である。画家パブロ・ピカソ (Pablo Picasso 1881-1973) をはじめ、多くのクリエイター達が子どもの創造性に着眼し、その作品からインスピレーションを得て作品を創作してきた。子どもの絵や造形は表現の本質、芸術世界の源なのである。

保育者が表現活動を支援するうえで子どもをひとりの人間として尊重し、その描画表現から学ぼうとする真摯な姿勢から子どもの描画に現れる個性と表現の本質が視えてくる。

本論ではローダ・ケロッグ (1998) 『幼児絵画の発達』とジェローム・シーモア・ブルーナー (Jerome S. Bruner 1976) 『認知能力の成長と 3 つの表象』の研究を基に、スクリブル期 (動作的表象期) にある子ども (男児 K) の描画考察から、未発達な子どものなぐり描きとして軽視される傾向にあった、この時期の表現活動が描画の発達、人間形成の基盤となる重要な時期であることを確認する。

2. 描画の考察方法

(1) 描画の分類方法 (ローダ・ケロッグ 1998) 『幼児絵画の発達』

- I. スクリブル (scribbles) 前期・後期
- II. ダイアグラム (diagrams/単体図)
- III. コンバイン (combines/結合図)
- IV. アグリゲイト (aggregates/集合図)
- V. ピクチャーステージ (picture・stage/絵画期)

以上 I ~ V の発達過程から I. スクリブル (scribbles) 前期・後期作品を考察対象とする。

(2) 表象の分類方法 ジェローム・シーモア・ブルーナー (1976)

『認知能力の成長と3つの表象』

I. 動作的表象 (enactive representation)

自己中心、外と内の区別が確かではない。動作による直接的な(感覚運動的)把握

II. 映像的表象 (iconic representation)

表面的な形のイメージ(映像)による対象の把握

III. 象徴的表象 (symbolic representation)

文字・記号・言語による対象の把握

上記3段階の表象発達を遂げた成人においては、全ての表象を持ち合わせて存在している。

(3) 対象作品の描画年齢(週齢)

誕生から1歳2か月[387日/61週目]で開始された男児Kの縦断的描画作品群から、スクリブル(scribbles)前期/後期の特徴を示す2歳8か月[975日/128週目]まで。

(4) 対象作品の描画環境(保育者の関わり)

・観察者・記録者

保護者(母親)が立ち合い記録(描画した日付, 描画の様子, 男児Kと観察者の会話, コミュニケーション内容)記録後、描画日付順に保存。

・観察者の描画活動への関わり

子どもの描画中、観察者(保護者を含めた大人)は指導的介入をしない。

描画する子どもからのアプローチ、声掛けには応じ、子どもから描画への参加欲求があった場合、観察者も描画に参加する。

・描画環境

描画環境(用紙・画材)は生活する場に常時整え、子どもが描画を欲求した場合、いつでも描画できるよう準備していた。

(5) 考察対象作品の抽出について

男児Kのスクリブル期描画作品全110点より、スクリブル期の発達と描画の特徴を示す12点描画抽出。【4. 作品S-1~S-12】

3. スクリブル期における描画の特徴

表1に示された基本的スクリブル20種類は、ローダ・ケロッグ(1998, p.19-22)による幼児絵画の発達I. スクリブル(scribbles)の分類である。

スクリブル分類番号1~20は発達順序の表記ではない。

表 1

基本的スクリブルと各スクリブル線の運動方向								
スクリブル 番号	スクリブル形態分類		線の運動方向					
			縦	横	斜め	円	変換	なし
スクリブル 1		点						●
スクリブル 2		単縦線 (単線)	●					
スクリブル 3		単横線 (単線)		●				
スクリブル 4		単斜線 (単線)			●			
スクリブル 5		単曲線 (単線)				●		
スクリブル 6		複縦線 (複線)	●					
スクリブル 7		複横線 (複線)		●				
スクリブル 8		複斜線 (複線)			●			
スクリブル 9		複曲線 (複線)				●		
スクリブル 10		うねうね開線					●	
スクリブル 11		うねうね閉線					●	
スクリブル 12		ジグザグあるいは波線					●	
スクリブル 13		単輪線					●	
スクリブル 14		複輪線					●	
スクリブル 15		渦巻線				●		
スクリブル 16		重なり円				●		
スクリブル 17		複円周				●		
スクリブル 18		拡がり円				●		
スクリブル 19		単交円				●		
スクリブル 20		不完全円				●		

子どもの描画は、身体的発達と連動して発達する。2. (2) に示された 3 つの表象から動作的表象期、物を握る、片手で掴む、放す、指先でつまむからのつかまり立ち、興味のある方向へ這うといった行動が表れる生後 10 ヶ月頃から画材を持たされるとその手を振り回し、画面に当たった拍子に点や線といったスクリブルの基本形が生み出され、初めての描画となる。このような体験が生活の中で繰り返されるうち、描画される基本的スクリブルが豊富になる。スクリブルについて、ローダ・ケロッグは以下のように定義している。

基本的スクリブルとは 2 歳あるいはそれ以下の幼児の作る 20 種類の形のことである。これらの動作は各種の筋肉緊張の様式をしめすもので視覚的ガイダンスが必要なわけではない。(ローダ・ケロッグ 1998 深田訳, p.18)

また、初期のスクリブルは、人間に先天的に備わっている精神的作用として行われる。スクリブルの線構成はあらかじめ心の中に貯えられたものでなく、形態の相互作用は眼と手の相互作用を通して働き、形は自然に動作から生まれてくるものであると説いている。

動作的表象と重なるスクリブル期、子どもは身の回りのあらゆるものに触れ、対象を知ろうとする。画用紙やクレパスといった描画のために準備された画材だけでなく、食事中に手についたケチャップでテーブルを叩き、グルグルと指を動かす拍子に残る点や線、地面や砂に手足や指が接触して出来た線や点もスクリブル体験となる。

ローダ・ケロッグ (1998, p.58) は、基本的スクリブルの描画形態が言語や文化、生活習慣の異なる世界中の子どもの描画に共通していることを 100 万枚に及ぶ子どもの絵の分析から見出した。子どもは自分が生まれた国や文化、生活環境、自然環境に適応しながら生活やあそびの中でスクリブル描画を体験し、発達を獲得する。

4. スクリブル期 描画の考察

(1) 考察対象であるスクリブル期の描画作品


スクリブル期の描画作品 (2) S-1~S-12 は、男児 K の描画開始 1 歳 2 か月 [61 週目] スクリブル前期から 2 歳 4 か月 [128 週目] スクリブル後期、次の発達段階であるダイアグラム (単体図) に移行する直前までの作品で表象は動作的表象期にあたる。



スクリブルの基本形態は、描画する子どもの筋肉緊張のわずかな差で複数の基本形態の特徴をあわせ持つものも描画される。そのため 20 種類の基本的スクリブルは無数の絵の適切な分類体系を提供する基準とし考察する。


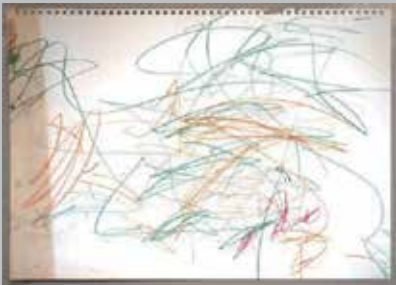
(2) スクリブル描画表の表記内容【スクリブル作品 S-1～S-12 合計 12 点】



作品は初めての描画・スクリブル前期からスクリブル後期まで日付順に表示

- ① 描画時の年齢と週齢
- ② 描画時の表象期
- ③ 描画に立ち会った母親により描画内に記録された内容
- ④ 基本的スクリブル 20 種類（表 1）から描画に用いられたスクリブル形態の抽出
- ⑤ 作品を描画する際の描画位置を表記（位置を作品写真表内に○でマーキング）

作品 S-1 ①1 歳 2 か月（61 週目）		②動作的表象期	
③「生まれて初めての描画」			
		④基本的スクリブル 1. 点 2. 単縦線 3. 単横線 ⑤描画位置 描画開始時は用紙の上に 乗り描画	
初めての描画			
			
写真 1 用紙上に	写真 2 木炭発見	写真 3 対象確認	写真 4 運動開始
<p>写真 1～4 は、作品 S-1 の描画に至るまで初めて描画環境を与えられた際の記録である。描画する用紙はベットのの上に敷かれ、その上に子どもが座り開始された。</p> <p>（写真 1）子どもが描画素材である木炭〔食べても安全な素材〕を発見（写真 2）木炭に興味を持ち、口に運んで確認（写真 3）気に入ったという動作表現の後、木炭を握った手を運動させる。（写真 4）この日は描画まで至らなかったが、この 5 日後に作品 S-1 を描いた。生まれて初めてのスクリブルは木炭を握った手を振り下ろす、振り回す動作の際、手に握った木炭が用紙に当たった軌跡から点・線を中心とした基本的スクリブルが描画された。自分の運動の跡が残ることを発見した子どもは同じ運動を繰り返シイメージを記憶する。ここにスクリブル番号 1. 2. 3. の描画が確認できる。</p>			

<p>作品 S-2 ①1歳5か月(79週目)</p> <p>③記録なし</p>	<p>②動作的表象期</p>
	<p>④基本的スクリブル</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 点 2. 単縦線 5. 単曲線 7. 複横線 10. うねうね開線 <p>⑤描画位置：5方向 画面の周囲、あらゆる方向から描画しているのが分かる</p>
<p>スクリブル初期で動作的表象期、画面の上下左右といった方向性の認識は定まっておらず自由にあらゆる方向から描画する。5方向からの描画を確認。腕の横往復運動から生じたスクリブル番号7. 複横線が表出し、複横線に交差(十文字)した複横線が表れるが、これは描画位置を変えて同じ複横線を重ねて描画したため生じている。</p>	
<p>作品 S-3 ①1歳6か月(80週目)</p> <p>③記録なし</p>	<p>②動作的表象期</p>
	<p>④基本的スクリブル</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 点 2. 単縦線 3. 単横線 4. 単斜線 <p>⑤描画位置：1方向</p>
<p>スクリブル初期で動作的表象期、スクリブル体験の蓄積から運動と描画の記憶が定着してくると腕の動きをコントロールし、線のバリエーションが増える。子どもが明確な意思を持って描画したクロス(十文字)はスクリブル初期から後期、経験が豊富になると次のダイアグラム/単体図に、より鮮明に表出する。作品 S-2 の複縦線による偶然の交差と比較すると、この作品では画面中央に直線をよどみなく描画し単縦線と単横線が交わる。この体験記憶が後の鮮明な十文字表現へとつながる。</p>	

作品 S-4 ①1歳6か月 (82週目) ③「赤はバァバァ」	②動作的表象期
	④基本的スクリブル 1. 点 2. 単縦線 4. 単斜線 5. 単曲線 7. 複横線 8. 複斜線 9. 複曲線 10. うねうね開線 11. うねうね閉線 13. 単輪線 20. 不完全円 ⑤描画位置：1方向
<p>スクリブル開始から4か月動作的表象期、描画の反復体験から記憶に定着した形態は再現できるようになる。日常生活における行動範囲の広がりや脳に刺激を与え、表現への探索意欲が進み動作的表象期と共に映像的表象期の兆候が表れる。保育者(母)による「赤はバァバァ」との記入から、子どもが描画を通して周囲とコミュニケーションを取り、その対象をこれまでの描画になかった独立した円で表現した。(画面右上)円は完全に閉じられてはいない。描画と表象の発達に伴い、新しい形態の獲得が顕著になる。保育者との描画を介してのコミュニケーションと共感、時間の共有は子どもの描画への喜びと意欲を高め、探索の原動力となる。</p>	
作品 S-5 ①1歳6か月 (82週目) ③記録なし	②動作的表象期
	④基本的スクリブル 2. 単縦線 3. 単横線 5. 単曲線 6. 複縦線 7. 複横線 8. 複斜線 9. 複曲線 10. うねうね開線 11. うねうね閉線 13. 単輪線 ⑤描画位置：2方向

<p>作品 S-5 1歳6か月（82週目）動作的表象期</p> <p>スクリブル初期、スクリブルの基本形態の獲得を進める。保育者（母）が描画内に記録した日付の上からスクリブルしている。描画する子どもと保育者の言葉によるコミュニケーションに加え、描画を通して相手と同じ行為（共同作業）を行うことでその喜びや楽しさを共感しようとしている。</p>	
<p>作品 S-6 ①1歳6か月（83週目） ②動作的表象期</p> <p>③記録なし</p>	
	<p>④基本的スクリブル</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 点 2. 単縦線 3. 単横線 7. 複横線 15. 渦巻線 17. 複円周 20. 不完全円 <p>⑤描画位置：1方向</p>
<p>作品 S-4 に表出した円の獲得が進む。複円周（左）から渦巻線（右）中央下に閉じられそうな円と三角形が表出。微細な運動のコントロールにより複円周の描画から渦巻線や閉じられた単独の円へと展開され、描画・造形表現の基礎形態となる幾何学形態（円と三角形）が確認できる。男児 K の縦断的描画作品から、幾何学形態の円、三角形、四角形（矩形）の獲得はスクリブル期に開始され、アグリゲイト／集合図に確かなものとなる。</p>	
<p>作品 S-7 ①1歳6か月（83週目） ②動作的表象期</p> <p>③「メクパール図書館のひよっこのお話会へ行った。今日は雨」</p>	
	<p>④基本的スクリブル</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 点 2. 単縦線 3. 単横線 4. 単斜線 5. 単曲線 6. 複縦線 7. 複横線 10. うねうね開線 13. 単輪線 14. 複輪線 15. 渦巻線 20. 不完全円 <p>⑤描画位置：1方向</p>

作品 S-7 1歳6か月 (83週目) 動作的表象期

作品 S-6 で表出した角のある形態 (三角形の原型) とスクリブルの混合。これまで獲得した形態を実験的に繰り返し描き、その組み合わせから偶然に出来た形やイメージを記憶して表現を広げる。描画した作品に対する周囲の反応も映像と共に記憶していく。

作品 S-8 ①1歳6か月 (84週目)

②動作的表象期

③「昼」



④基本的スクリブル

1. 点
2. 単縦線
3. 単横線
4. 単斜線
5. 単曲線
6. 複縦線
7. 複横線
8. 複斜線
10. うねうね開線
11. うねうね閉線

⑤描画位置：1方向

スクリブル後期、これまで画面の中にあらゆる方向からスクリブルを配置する描画が中心であったが、この作品では一定の領域を持った大きな形態の中にスクリブルが描かれている。領域の中に配置されたスクリブルは基本的スクリブルを中心とし、それに加えて幾何学形態の矩形 (四角形) の要素を持つスクリブルも表出している。作品 S-6 で円、作品 S-7 で三角形、本作品で矩形 (四角形) の原型となるスクリブルが描画され、幾何学形態の獲得が進行している点からスクリブル後期に入り、次の発達段階ダイアグラム/単体図に向かって歩みを進めている。

作品 S-9 ①1歳8か月 (91週目)

②動作的表象期

③「ウンチをちゃぶ台の上でした。大量」



④基本的スクリブル

1. 点
2. 単縦線
3. 単横線
4. 単斜線

⑤描画位置：1方向

作品 S-9 1歳8か月(91週目) 動作的表象期

作品 S-8 で、スクリブル後期に入り表現される形態のバリエーションが豊かになると、整理された描画も生まれる。描画されたスクリブルの要素は作品 S-1 初めての描画とほぼ同じ点・単縦線・単横線・単斜線であるが、腕の運動から偶然生まれた初めての描画の認識とは異なる。描画運動をコントロールできる能力と子どもの意思が明確になり、これまでに獲得した形態から線を選び描くため、選別されたスクリブルが表現される。描画の発達と同時に表象の発達においても動作的表象期に加え映像的表象期の要素が確実なものとなってくる。線が交差する形態は次の段階、ダイアグラム/単体図になるとより明確に表出する。十文字の獲得は以後の描画で活用され、これらのスクリブル形態を基礎としてピクチャーステージ(絵画期)、象徴的表象期に入り文字の獲得へとつながる。

作品 S-10 ①1歳8か月(91週目)

②動作的表象期

③「今朝はレインコートを着て外遊び。夕食の途中で嘔吐。でも元気」





④基本的スクリブル

1. 点
2. 単縦線
3. 単横線
6. 複縦線
7. 複横線
11. うねうね閉線
13. 単輪線
14. 複輪線
16. 重なり円
17. 複円周
18. 拡がり円
19. 単交円
20. 不完全円

⑤描画位置：1方向

この日外あそびを経験し、その体験と感動が素直に表れている。「寒かったね」「風がビュービュー」など、保育者と共に体験の刺激を描画を通じて共有、共感する喜びが画面いっぱいにスクリブルで表現された。画面右上(緑色)に完全に閉じられた円が現れ、閉じられた円は描画に新しい展開を与える。男児 K のスクリブル作品群の中で幾何学形態「円」の表現が確実なものとなったことを示す作品である。円の獲得は以後ダイアグラム/単体図の描画表現に応用される。スクリブル後期、スクリブル基礎形態が豊富になり、繰り返し描画されるところから、形態の獲得が定着してきているのがわかる。

<p>作品 S-11 ①2歳4か月（128週目） ③記録なし</p>	<p>②動作的表象期</p>
	<p>④基本的スクリブル 6. 複縦線 7. 複横線 8. 複斜線 9. 複曲線 11. うねうね閉線 14. 複輪線 17. 複円周 20. 不完全円</p> <p>⑤描画位置：1方向</p>
<p>画面中央に領域を持った不完全円の中にスクリブル。ひとつの形、領域を持った描画は後の人間の顔、乗り物といった表現へと展開される。スクリブル初期（動作的表象期）自分と他者の身体的領域、存在の区別が未分化な子どもは周囲のあらゆるものに触れ、その運動の軌跡である描画体験を繰り返しながら自分の存在を確かめる。描画の発達とともに自我も芽生え、スクリブル後期からダイアグラム／単体図への移行と映像的表象期を持ち合わせる頃、領域を持ち独立した形態を描画する。</p>	
<p>作品 S-12 ①2歳4か月（128週目） ③「おふねのせんろ」</p>	<p>②動作的表象期</p>
	<p>④基本的スクリブル 1. 点 6. 複縦線 7. 複横線 9. 複曲線 11. うねうね閉線 14. 複輪線 16. 重なり円 17. 複円周 18. 拡がり円 19. 単交円 20. 不完全円</p> <p>⑤描画位置：1方向</p>
<p>画面一杯に描画されたスクリブルは「おふねのせんろ」と題され、具体的なイメージを伝えようとしている。作品 S-11 の表現から更に意欲的に描かれている。2歳4か月、生活の中で行動範囲や体験が広がり、身体的発達から自分でできることや表現が他者に認められ、コミュニケーションが進むと新たな描画表現獲得のため実験と探索を進め、スクリブルを持ち合わせながらダイアグラム／単体図への移行が始まっていることがスクリブル形態と画面の構図から確認できる。</p>	

5. まとめ ～スクリブル描画への関わり～

4. 作品 S-1～S-12 のスクリブル描画の考察から子どもが日々繰り返される描画の実体験を通して新しいスクリブル形態を獲得し、その形態を実験的に組み合わせながら描画を展開させ、保護者とのコミュニケーションや外あそびなど日常活動の広がりと共に好奇心を持って意欲的に探索している様子が確認できる。

0歳（生後10か月頃）から開始されるスクリブル期、身近に存在する保育者が子どもの描画表現に尊厳を持って接し、発達に寄り添った支援と環境設定、関わりを持つことが豊かな感性と脳や身体の健全な発達へと導く。ローダ・ケログ（1998）が唱える0歳～3歳までに描画される「スクリブル」を「なぐり描き」と称したV・ローウェンフェルド（Viktor Lowenfeld 1967）は「なぐり描き」時期の重要性を幼児美術研究「自己表現における最初の段階 —なぐり描きの段階—（2才より4才まで）」の中で、次のように述べている。

なぐり描きの初期段階においては、活動を進行させるために、教師が与える励まし以外の刺激は必要ない。（中略）なぐり描きは干渉されるべきではない。この法則は、はじめの段階にも後の段階にも同じように必要である。なぜなら、このような干渉は、重要な生命的経験を子供から奪い取るばかりでなく、その後の仕事でかれを制御し勝ちだからである。今述べたような干渉は、子供に実物再現をさせようとするとところに生ずるのだが、大人にはそれがわからずに、子供の運動感覚機能の成長を制御することになる。（V・ローウェンフェルド 1967 竹内・堀内・武井訳, p.138）

子どもの描画活動への支援とは、主体は子どもにあることを認識し、毎日のあそびの中で描画表現できる環境作りとその表現を受け止め、描画を共に楽しみその時間を共有することである。日々の描画活動に寄り添い観察、記録しその変化や発達の兆しに気付くことができる立場の保育者が一人ひとりの個性や描画発達の最大の理解者となる。

スクリブル期の子どもの描画活動は汚れや安全な材料など配慮が必要となるが、動作的表象期、全身の感覚を研ぎ澄まし、その体験から発達を獲得する子どもにとってあそびの実体験が重要な時期であり、その体験から次の発達過程へと歩みを進める。

人間の描画発達の歴史においてアナログ（実体験）中心の時代、日常生活や自然体験、あそびの中で自然と導かれスクリブル体験できる環境があった。現代の子どもたちの生活はかつてないほどデジタル世界が身近に存在し、幼い頃からスマートフォンやパソコン機器によるバーチャル（仮想現実）世界であそぶ時間が増え、五感を通してその繊細な違いを体験するアナログなスクリブル体験から遠ざかった環境にある。その影響に憂慮しながらも、これから更に進歩するデジタル世界を子ども達の生活から排除することは現実的ではない。子どもたちのあそびや生活の中で、デジタル世界との健全な共存方法はこれからの課題である。

あとがき

生後 11 ヶ月の歩き始めた甥と雨上がりに散歩をした時、公園の地面にできた水たまりを発見した甥が自分なりの速足で歩み寄り迷わず水面を叩き、水しぶきを浴びながら水面に広がる波紋に「こんな事になるのか」という驚きと感動でいっぱい表情を見せた。更に、水たまりの中に手を突っ込み、地面を撫でるようにグルグルと手を動かすと、水が土色になって渦を巻いて変化した。甥は水たまりの中に踏み込んでその様子をじっと見つめ、興奮してアアアと叫び、裸足で地面を踏み鳴らした。その拍子に、やわらかい泥の上に足跡の凹凸が残ることを発見すると何度も地面を踏みつけ、その跡を確認する。この子にとって、この地面への身体アクションが初めての描画体験だったのである。この行為の後、水たまりの中にでんぐり返しをするように頭の頂点を水たまりにつけてその感触を髪の毛と頭皮で味わい、最後に水を飲もうとした。行為は母親によって制止させられたが、動作的表象期、子どもは自分にでき得る限りの方法で新たな環境に触れ、自分の行動と運動から生じた軌跡（スクリブル）を残したのである。全身ずぶ濡れになり母親に抱かれて帰る際、両手を水たまりに広げながら足をばたつかせ、もっとやらせてくれと大泣きした。

外あそびで汚れることを恐れ、水たまりから子どもを遠ざけていたら、あの時全身で身震いするような感動と発見を体験できなかっただろう。水や土の感触を子どもが味わい、その刺激から初めてのスクリブル体験へと導かれたのも、その行動を寛容に見守る保育者の存在があったからである。

デジタル中心の現代においても、子どもの発達アナログな実体験によって導かれる。大人にとっては水たまりという日常的な存在が、毎日のあそびから発達を遂げる子どもにとって好奇心を育て、発達を導く刺激的で魅力的な存在であることを雨上がりの散歩が教えてくれた。

本研究は、子どもの誕生から毎日の生活で最も身近に寄り添い、最大の理解者である保育者（母親）により収集、記録された資料を基に考察している。

本論で取り上げたスクリブル期描画作品の作者 K 君は現在 12 歳になり、絵画の発達が完成される 18 歳に向かって発達の歩みを進めている。生まれて初めての描画から描画環境を整えて現場に立ち会い子どもの描画に尊厳を持って接し、制作日、その状況、子どもの語り掛けを記録し続けた K 君と母親の存在なしに本論は成立していない。貴重な資料を提供していただいた K 君親子に心から感謝してやまない。これから更に幼児造形研究を深めることとする。

参考文献

- V・ローウェンフェルド, 竹内清・堀内敏・武井勝雄共訳 (1967) 『美術による人間形成』, 黎明書房.
- 斎藤亜矢 (2014) 『ヒトはなぜ絵を描くのか 芸術認知科学への招待』, 岩波書店.
- J. S. ブルーナー著, 岡本夏木他訳 (1976) 『認識能力の成長 (上)』, 明治図書出版.
- 竹永亜矢・塙和道著, (2017) 「美術表現研究 講義「幼児表象画」の縦断的記録の検証」『近畿大学九州短期大学研究紀要』, 第 47 号 pp.64 - 84
- 竹永亜矢・塙和道著, (2018) 「美術表現研究 講義「幼児表象画」の描画の発達と特徴」『近畿大学九州短期大学研究紀要』, 第 48 号 pp.38 - 53
- 鳥居昭美著, (1995) 『子どもの絵をダメにしていますか?』, 婦人生活社.
- 内閣府編著・文部科学省編著・厚生労働省編著, (2017) 『平成 29 年告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 原本』, チャイルド本社.
- 中川織江著, (2005) 『粘土遊びの心理学ヒトがつくる、チンパンジーがこねる』, 風間書房
- 塙和道・竹永亜矢著, (2016) 「幼児表象画に学ぶ、講義「人物画物画演習」の導入法と描法」『近畿大学九州短期大学研究紀要』, 第 46 号 pp.47 - 51
- H ガードナー著, 星三和子訳 (1998) 『子どもの描画 一なぐり描きから芸術まで』, 誠信書房.
- 宮武辰夫著, (1985) 『幼児の絵は生活している』, 博文社.
- 山本肇一・芝田勝也・熊谷啓子著, (2009) 「幼児期から児童期に、基本的な生活習慣や規範意識を身に付けることの重要性について一脳の発達と心のメカリズムの見地から」『奈良県立教育研究所 研究紀要 研究集録』, 第 17 号 pp.4-5
- ローダ・ケログ著, 深田尚彦訳 (1998) 『児童画の発達過程 一なぐり描きからピクスチャへ』, 黎明書房.